
エタ

l i n g - m e i

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

エタ

【Nコード】

N7439B

【作者名】

ling-mei

【あらすじ】

エタは、きれいな長い赤毛を持つ少女。髪の毛が美しいこと以外は、特別に良く出来ることもない。ある日、エタの母親が突然亡くなった。その日を境に、エタは笑うことがなくなり…。

第1話

エタは、赤毛のきれいな少女だった。腰まで伸びた赤毛を、丁寧に編んで、三つ編みにしていた。勉強も、運動も、何一つ特別秀でたものがなかったエタにとって、唯一自慢できるものが、この赤毛だった。

「ねえ、お母さん。私の髪の毛、きれい？」

エタは決まって毎朝お母さんに尋ねた。お母さんは、毎朝、エタの髪の毛を編むときに、静かに微笑んで言ったものだった。

「世界で一番きれいよ」

ある朝、エタのお母さんは言った。

「あなたの10歳の誕生日には、可愛らしい髪飾りを買ってあげるわ」

しかし、お母さんは、エタが10歳になる一週間ばかり前に、病気で死んでしまった。もともと身体が弱かったのだと、お父さんも周りの人も言った。エタは、一滴の涙もこぼさなかった。お母さんの死に顔は、あまりにきれいだったから。髪はつややかで、ほっぺたは薔薇色だった。エタは、今すぐこの長い箱の中からお母さんが起き上がり、毎朝のように、エタの髪の毛をくしけずり、編んでくれるのだと信じていた。もちろん、そんなことは起こるはずもなく、お母さんは、土の下で、小さな生き物たちに食べられて、溶かされてしまった。

お母さんが土の中の住人になってから、エタは笑わなくなった。髪飾りを買う約束を忘れ、お母さんは遠い国へ旅行に行ってしまったのだと思った。やはり涙は出なかった。胸の中で、どろどろしたものが、ゆっくりと円を描いていた。

エタ

お母さんがいなくなり、1年がたった。エタは、もうすぐ11歳になるところだった。家から離れた林の中の小道を散歩していた。

誰とも遊ばず、1人でこうしていることが好きだった。誰とも口を聞かなくていいし、自分の思うがままにできるからだ。

林を抜けると、大きな原っぱがある。そこには小さな黄色い花が咲いていて、春には蝶々が踊るのだ。エタは、原っぱに寝転んだ。柔らかな風が、エタの赤毛をゆらゆらさせた。編んでくれる人がいなくなつてから、エタは、三つ編みにせず、いつも腰のところ髪を垂らしていた。くしを入れてくれる人もいない。お父さんはお母さんがいなくなつてから、死に物狂いで働くようになった。エタは、1人ぼつちだと思つた。自分が本当に生きているのか、分からなくなつた。

ポケットから、小さなナイフを取り出した。エタは、最近、いつでもナイフを持ち歩いていた。そして時折、自分が生きているか分からなくなると、腕でも、足でも、どこかに傷を作る癖になっていた。赤いとろりとしたものが流れ出すと、痛みが身体中を突き抜けて、ようやく、エタは自分が生きていることを理解できるのだつた。今も、エタは、自分の腕にナイフの尖つた刃を当てた。真っ赤なものが流れ出す。エタは、それを見て、身体中の痛みを感じた。

「生きているわ」

エタはつぶやいた。赤い液体に手を触れた。確かに、自分の身体の一部だ。エタはもう一度つぶやいた。

「私はちゃんと生きているわ」

そして、眠りに落ちた。日差しが優しく、風が心地よかつた。

第2話

しばらくして、エタは目を覚ました。身体を起こした。さつき流した赤い液体は、傷口に覆いかぶさるようにして固まっている。エタはそれにそっと触れた。

すると、周りの景色がいつもと違うことに気付いた。鮮やかな緑の原っぱも、可愛い黄色の花もない。暖かな日差しも、柔らかな風もすっかりなくなっている。変わりに残っているのは、枯れ草の草原と、その先に広がる枯れ木の林。林のずっと向こうにのぞくのは、ごつごつした岩山と、灰色の空。空には、ぼつかりと海が浮かんでいる。海はぎらぎらと白く光り、今にも山を襲い、林を沈め、エタのいる枯れ草の草原を埋め尽くすように見えた。

立ち上がり、くると周りを見渡した。見慣れぬ景色だけが広がる。風がざわざわ吹いて、エタの長い赤毛を掻き乱した。風が吹きぬけたあと、目の前を、黄金の光が通り過ぎた。ものすごいスピードでそれは目の前を駆け抜け、ずっと遠くへ消えてしまった。エタはその光の先をじっと見つめていた。また、風が吹きぬけた。さつきよりも強く、ごうごうと音をたてた。

「何かしら」

エタはつぶやいた。また、黄金の光がこちらに向かってくる。今度は、さつきよりもずっとゆっくりだった。エタはその光をじっと目で追った。光はだんだんとエタのところ近くに近づいてくる。そして、目の前で光が止まったかと思うと、エタは目を疑った。黄金のライオンだった。

エタは声が出せなかった。ライオンの目は、あまりに大きく見開かれ、赤く血走り、たてがみはとげとげに立っていたからだ。牙はむき出しで、歯茎のピンクがやたらに濃く、鮮やかだった。

「何をしている」

ライオンは、うなりながら言った。エタは、喉まで声が出ている

エタ

ものの、それ以上何も出来なかった。恐怖感だけが、エタの思考を支配していた。ようやく11歳になるつかという少女に、このライオンの形相はあまりに恐ろしかった。

「早く来い。早くしないと亡くなってしまおう」

ライオンは早口にそう言つと、無理やりエタを背中に乗せ、またさっきのような猛スピードで平原を駆け抜けた。

風があまりに強く顔に当たるので、エタは目を開けていられなかった。必死の思いでライオンのたてがみを握り、身体中を強張らせていた。黄金の塊は、草原を横切った。枯れ草がちぎれて飛び散った。エタは気を失ってしまった。

第3話

「起きろ」

耳元で、低いしわがれ声がした。エタはうつすらと目を開けた。「早く」

目の前に、ライオンがいた。さっきのような、血走った目ではなかった。優しい、茶色い目をしていた。たてがみは垂れて、しなやかな黄金の輝きを放っていた。ライオンは、桃色の舌で、エタのほつぺたを舐めてくれた。エタは、横になったまま上を見上げた。天井があつた。さっきの灰色の空ではなかった。立ち上がり、またくるりと辺りを見回すと、お城の中のようにだった。丸い柱が両脇に並び、天井の両脇には、鮮やかな絵が描かれている。足元には真っ赤な絨毯。床はすべて、ぴかぴかに磨き上げられ、エタの顔を映した。エタは、自分の赤毛がぐちゃぐちゃになっているのに気付いた。

「くちゃくちゃだわ」

ライオンは首を傾げた。

「私の髪の毛のことよ」

エタは、腰まで伸びた赤毛を、手ぐしで整えようとした。しかし、お母さんのように上手く整えることができなかった。仕方なく、エタはあきらめて、髪の毛から手を離れた。ライオンはそれを見ると、また低いしわがれ声で話し始めた。

「この先に女王様がいる。最期を皆で看取らねばならない」

「女王様？」

エタが思わず眉をしかめると、ライオンは気付いたようにつぶやいた。

「おまえ、この世界の者ではないな」

そして、牙をむきだし、また血走った恐ろしい目つきになった。たてがみがつんつんと立った。今にもエタに飛び掛りそうな勢いだつた。地鳴りのような唸り声が、エタの身体をぶるぶるさせた。エ

エタ

タは、そのまま腰を抜かしてしまった。ライオンは、じわりじわりとエタの目の前に迫ってきた。

「やめなさい」

ライオンがエタに噛み付こうとした瞬間、天井の方から、鈴を振るわせたような声が聞こえた。ライオンはその声を聞くと、むき出しになっていた牙をしまい、たてがみを垂れさせた。血走った目は、さっきの茶色い優しい目に戻った。エタは頭の上を見上げた。そこに、真っ白なワンピースを着た女の子がいた。その女の子は、不思議なことに、宙に浮いていた。羽根もないのに、ふわふわと浮かんでいた。

第4話

女の子がゆっくり降りてくると、ライオンは、猫のような声をたてて、女の子にじゃれついた。女の子の白い小さな手は、ライオンのたてがみを優しく撫でた。

「あなたをここに連れてきたのは私よ」

女の子はライオンから目を離して言った。エタは、あっけにとられて、口をあんぐり開けたままだった。

「あなたに手伝ってほしいことがあるの」

そう言うと、女の子はエタの前に歩み寄り、エタの手を握った。

女の子の手は固く、冷たかった。

「私の名前はティナ。あなたは、エタ。そうでしょう?」

「そうよ。どうして知っているの?」

「私は何でも知っているわ」

ティナはそう言って微笑むと、エタの手を引いて、赤い絨毯の上を歩き出した。ライオンもその後にしたがった。絨毯の上をしばらく歩くと、大きな赤い扉があり、真ん中に大きな鍵穴があった。ティナはその鍵穴に自分の手を差し込み、ぐるりとねじった。手がちぎれないかと思うくらいにねじったとき、鍵穴はガチャんと、鉄の重たい音をたてた。それと同時に扉も開いた。エタは、鍵穴から抜き取ったティナの手を眺めた。手は真つ赤に腫れ上がっていた。

「ここを真つ直ぐ行くと、女王様の寝室になるわ」

ティナがそう言ったとき、廊下の向こうに、大きな箱のようなものが現れた。よく見ると、周りには鮮やかな装飾の施されたカーテンが張り巡らされていて、柱の部分には黄金の彫り物がしてあった。エタは、こんな豪華なものを見たことがなかった。

エタが、カーテンに手を触れようとすると、ライオンがものすごい速さで駆け寄ってきて、ひどい唸り声をあげた。

「気安く手を触れるな!!!」

エタ

エタは驚いて手を引つ込めた。ティナが傍にやって来て、ささやくように言った。

「女王様はこの世界の住人には、あまりに高貴すぎるお方なの。だから触れちゃだめ」

そう言つと、ティナはまた、エタの手を引いて、もと来た絨毯の道を戻りだした。ティナは、怒りに震えるライオンの方を向いて言った。

「もういいわ。 戻りなさい」

それを聞くと、ライオンはまた猫のように縮こまり、ぺこんと頭を下げた。エタには、その様子がとても可愛らしく見えて、思わずふふつと笑ってしまった。

絨毯の道を歩きながら、ティナは言った。

「この世界は不思議でしょう」

エタは無言のままうなずいた。

「すべて女王様が統治していらつしやるの」

絨毯の道が途切れ、薄暗い石畳の道になった。壁も殺風景な岩の壁になり、所々に薄暗いろうそくが頼りない光を灯しているだけだった。エタは、身震いをした。どこからか冷たい風が吹いてくる。老婆のすすり泣きのように聞こえて、エタは思わずティナの冷たく固い手をぎゅつと握った。

「今、女王様はご病気で寝込んでいらつしやるのよ。 そのご病気を治すお薬が、この世界のずっと東の果てにあるの。 でも、この世界の住人で、そんな冒険をするような勇敢な者はいないわ。 皆、女王様がお作りになった世界で、気楽にのうのうと暮らしているの」

石畳が、カツンと音を立てた。 ひび割れがひどかった。 エタは、ときどきそのひび割れの隙間につまづいた。 ティナは何も気にしないように、ずんずんとエタの手を引いて歩いていく。 エタは必死にそれに従った。

エタ

「だからあなたをこの世界に引き込んだの」

急に、ティナが立ち止まり、エタの方を見つめた。 ティナの顔は、

青白く、目は灰色に濁っていた。病人のように、頬はこけていた。

「お願い。どうか、女王様のお薬を探してきてほしいの。この世界の住人にはできない。あなたなら、きっとできるわ」

エタはわけが分からなくなった。震える声でティナに言った。

「どうして…私なの？」

「たまたま、あなたがあの草原にやって来たからよ」

ティナはまた歩き出しながら言った。エタは、黄色い花の咲き乱れる鮮やかなあの原っぱを思い出した。

第5話

石畳の道が、今度は古ぼけたレンガの道に変わった。ろうそくはなくなり、壁も天井も、あたり一面をいばらが取り囲んでいた。いばらは隙間なく、びつちりと辺りを取り囲んでいる。空気が埃っぽかった。エタは時折せきをした。

「あなたのいたあの草原が、この世界とあなたの世界をつなぐはこのようなもの。ちょうど、この世界の草原と、あの草原は対照的だったでしょう。 枯れ草の草原と、若草の草原。 灰色の空と、紺青の空。 女王様がお元気だったときは、この世界も鮮やかな色でむせかえるようだったの」

レンガの道が、ゴツゴツと鈍い音を立てた。さつきよりも、ティナの手は、より冷たく感じられた。ずっとエタと握り合っているのに、ますます冷たくなっているようだった。見ると、手も真っ青色をしていた。この子も病気なのかしら、とエタは思った。

「急がないと、この世界は崩れ落ちてしまうの。 女王様だけじゃない。 私も、さつきのライオンも。 あの草原も、山も海も空も。 すべて消えてしまうの」

「できっこない」

エタは言った。目は恐怖で涙ぐんでいた。

「私は何もできないわ。 得意なものは何一つないのに。 お願い、早くもとの世界に帰して」

「この世界が崩れれば、あなたの世界だって危ういの」

ティナは静かに言い放ち、小さな牢獄の前で立ち止まった。鍵穴に無理やり指を突っ込み、ねじった。カチャリと音がして、扉が開く。抜き取った指は、さつきのように大きく真っ赤に腫れ上がっている。ティナはそんなことは気にも留めずに言った。

「ひと晩だけ、ここで休みなさい」

そして、エタを無理やりその中へ押し込んだ。牢獄の床は、固い

エタ

岩でできていて、壁は冷たい氷だった。冷たく、湿った空気がその中を旋回している。エタは、くしゃみをした。寒かった。

「ねえ、もっと温かい部屋はないの？ どうして私を閉じ込めるの？」

ティナは何も言わずに、牢獄から離れていった。鉄格子の間からティナの足音だけが響いている。その音も、しばらくして消えてしまった。エタは、部屋の隅にある小さなベッドに手を触れた。固くて、湿っていた。うすっぺらの毛布がかかっていた。毛布は、紙よりも頼りなく、ごわごわしていた。エタは泣きたくなった。

そのとき、氷の壁にある小さな窓から声がした。

「お食事です」

そして、小さなお盆が差し出された。お盆を持つ手は、真っ青だった。さっきのティナの手よりも、ずっと青だった。エタはそれを黙ったまま受け取った。壁に手が触れて、冷たさが身体中を走った。エタは冷たい痛みを何とかこらえて、お盆を抱えた。見るとお盆の上には、豆のスープと、小さなパン、それに、コップ一杯の水がのっていた。

「なあに？ これ」

エタの言葉も聞かず、食事を運んできた手は、すぐに引っ込んでしまった。

エタは、仕方なく、そのお盆の上をじっと眺めた。豆のスープはすっかり冷え切って、湯気1つたっていない。パンはかちんこちんで、果たして噛み切れるだろうかというものだった。水の入ったコップは濁っていて、しっかりと洗っていないように思われた。それでも、とてもお腹が空いていたから、文句を言いながらも、豆のスープを流し込み、噛んだか噛まないか分からないうちに、パンを水とスープで喉に押し込んだ。食べ終わると、いくらか身体は温まってきた。エタはそのままベッドに横になり、冷たさすら忘れて眠った。夢1つ見ないほど、エタは深く、深く眠った。

第6話

「エタ」

耳元で声がした。

「起きなさい」

エタは、二度目の声でようやく目を覚ました。ティナが顔をのぞき込んでいる。身体を起こすなり、エタは辺りが変わっていることに気付いた。冷たい氷の壁の牢獄にいるはずだったのに。

「ここはどこ」

エタはつぶやいた。真っ暗な森の中にいた。牢獄ほどではないが、そこもやはり寒かった。湿った空気は相変わらずで、かすかに木々の香りがすることだけが唯一の救いだった。エタは、木々の匂いが好きだったから。しかし、木々はすべて丸裸だった。薄暗いのは、空が曇っているからだだった。太陽の輝きなど一切なかった。

「この道を真っ直ぐいくのよ」

ティナは早口に言った。

「ここを抜けると、岩山があるわ。その山も越えて、もっと真っ直ぐ行くの」

自分が女王様の薬を探しに行くのか。エタは絶望的な気持ちになった。それに、どうやってあの城の牢獄からここまで来たのだろうか。それも、自分が眠っている間に。

「お願い。女王様はあともって2日か3日なの。急いで」

ティナはそれだけ言い残すと、その場につずくまってしまうた。

「ティナ？ ねえどうしたの」

「いいから行きなさい」

エタは、がくがく震えて、身動きが出来なくなった。ティナはどうつたというのだろう。うづくまったティナは、必死に顔をあげて、エタを見つめた。灰色の目は、もう生氣すら感じられなかった。顔の表面から、頭蓋骨の形すら分かるように思われた。エタは、息を

呑み、自分の行く先の道を見つめた。道というようなものではなかった。もしも自分が動物であれば、ようやく平気で通れるような、そんな荒れ果てた道だった。

「早く」

ティナはまた言った。声はすっかり枯れ、初めに会ったときの、鈴を振るわせたようなきれいな声ではなくなっていた。エタは、言われるがまま、自分の行くべき道を行った。途中、何度もティナの方を振り向いた。ティナは相変わらずうずくまったまま動こうとしない。エタは恐くなり、振り向こうともせず走り出した。林の中の荒れた道を、何度もつまずきながら。今度振り向くときには、ティナはもしかしたら……。そんな考えが何度も頭を巡った。だから、振り向かなかった。

木々のうろが、人の顔に見えた。枝を揺らす音が、誰かに追いかけられる足音のように聞こえた。エタは叫びながら、その音をかき消そうとした。赤毛は、エタの腰で激しく波打った。風が何度もざあっと吹き寄せて、赤毛をいっそう乱暴に激しく揺らした。

第7話

どれくらい走ったか分からなかった。エタは、疲れきって座り込んだ。お腹も空いてしまった。あれだけの食事では、エタの胃袋は満足し切れなかった。

「東つて、こつちでいいのかしら」

エタがつぶやくと、目の前の茂みがかさがさと揺れた。風ではなかった。エタは目を見張った。何か、恐ろしいものが出て来るのかもしれない。もしかしたら、狼や熊かもしれない。エタの膝は震えだした。

がさつと音を立てて、茂みから小さな小人が出てきた。お母さんに読んでもらった、白雪姫に出て来るような、そんな小人だった。しかし、小人の茶色っぽい服は薄汚れていて、ひげも、想像していたのよりずっと短かった。ちょこんと、あごにぶら下がっているだけだった。

小人は、肩に重たそうな袋を担ぎ、でこぼこの道を慣れた様子でずんずん進んでいく。エタは、こつそりその後を追いかけた。小さな足で、小人はいとも簡単に歩いていく。大きな岩も、平気で登ってしまった。エタにはその大きな岩を登ることはできなかった。歩きすぎて、すっかり足が棒になっていた。

「待って！」

思わず叫んでしまった。岩のてっぺんから、小人がエタを見下ろした。

「お願い。行かないで」

小人は、肩に担いでいた袋を下ろすと、エタを両手で引き上げてくれた。エタは息を切らして、何とか岩のてっぺんまでよじ登った。小人の担いでいた袋は、中で何かが動いている。エタは、袋にそつと触れた。小さな動物が動いているようだった。小人は、エタを不思議な目で見つめている。青い瞳の小人だった。

「私のいた元の世界に戻りたいの」

エタは言った。

「あなた、帰り道を教えてくれない？」

小人は、何も分からないというふうに、肩をすくめてから言った。

「お譲ちゃん、この世界は一つだけだ。他の世界なんぞありゃせんよ」

「嘘よ。私は確かにここに連れてこられたの。ティナって子に連れてこられたの」

「ティナだって？」

小人は目をまんまるにした。青い瞳が大きくなった。外国のお人形さんみたいだと、エタは思った。小人は短いひげに触れながら言う。

「お譲ちゃん、ティナ様にお会いしたことがあるのかい？」

「ええ、そうよ」

ますます小人は目をまんまるにした。

「ティナ様は、女王様にお仕えしている者の中で、一番偉いお方だ。お譲ちゃんみたいなのが、どうしてティナ様と？」

「分からないの。早く私は自分の世界に戻りたいの」

「だから、この世界は一つだけだ。お譲ちゃん、病気なのかい？そんなよく分からないことを……」

エタは、病気という言葉で、ティナに言われていたことを思い出した。

「私は、女王様の薬を取ってくるようにと言われて、この世界に来たの。でも、もうたくさん。こんな恐ろしい世界じゃ、私の方が女王様よりも早く死んでしまうわ」

「女王様が死んでしまう？」

小人は声をひっくり返した。

「お譲ちゃん、それはよくない！今すぐその薬とやらを探すんだ！」

「あなたは？あなたは何もしないの？」

エタは小人の顔をのぞき込んだ。小人は首をぶんぶんと横に振った。

「わしにそんな無謀なこと、できるはずがなろう！」

そう叫んで、小人は岩を滑り降り、どこかへ走り去っていった。

エタは、あつげにとられてしまった。ぽつんと一人、岩の上に残されてしまった。小人は、担いでいた袋だけを、エタのもとに残していった。

第8話

エタは、袋の中で動いているものが何か気になった。そっと、袋の紐を解いて、中をのぞいた。中で、緑色の光が輝いた。一瞬、その光に見とれていると、光は袋から勢いよく飛び出した。

狼かしら、いえ、狼にしては小さすぎるわ。うさぎかしら、いえ、うさぎにしては恐ろしい顔をしているわ。エタは心の中でつぶやいた。

その口は狼のように長く、口からのぞいた牙は鋭く、耳はうさぎのように長かった。目つきはあまりに凶暴だった。しかし、身体はとても小さかった。エタの両腕に、すっぽり収まってしまいうくらい大きさだった。

「おまえ、小人じゃないな」

その、狼のような、うさぎのような動物は、甲高い声で言った。

「小人はさつきどこかへ行ってしまったわ」

エタは、その動物があまりに小さく、甲高い声をしていたので、恐怖心がなくなっていた。そのおかげで、堂々と話をする事ができた。

「あなたは、この世界と、もう一つ、別の世界があることを知っている??」

「別の世界?」

その動物は、さつきの小人のように目をまんまるくして言った。

ああ、この子も何も知らないのだと、エタはがっかりした。もう、女王様の薬を見つけてあげるしか、帰る方法はないのだろうか。

「最近、この森がおかしいんだ」

その動物はささやく。森といっても、林に近かった。木々は丸裸だったから。

エタ

「俺の兄弟はどこかへ消えた。いつもの住処にも誰もいない。食べるものも底をついた。このままじゃ俺たちは飢え死にしちま

う

「女王様が病気だから？」

「女王が？」

エタの言葉に、その動物は敏感に反応した。エタは、ティナに言われたことを、その動物に教えた。動物は、長い耳を揺らしながら、エタの言葉に聞き入った。

「そりやまずい。女王がいなけりや、俺たちは生きていけねえ」

「私が薬を見つけたら、きつと大丈夫。…ティナもそう言ったわ」
小さな動物は、決心したように言った。

「俺が、東の果てへ案内してやる。途中まででいいなら、連れて行ってやる」

「本当？」

エタが言うと、その動物はうなずいた。

「俺はムー。おまえの名前は何だ？」

「私はエタっていうの」

「エタか」

ムーは、長い耳を前後にゆらゆらさせると、さっきの小人のように岩から滑り降りた。エタは、ゆっくり慎重に、岩から降りた。ムーは、緑色に輝く目をぱちぱちさせて、辺りを見回した。

「東はこっちだ」

エタは、ムーの後に従った。ムーは、うさぎのようなしっぽをしていた。不思議な生き物だと、エタは思った。こんな変わったものが、この世界にはまだまだあるのかしらと思った。

「さっきの小人は何なの？」

先頭に立つムーに、エタは尋ねた。ムーは振り返らずに言う。

「あいつ、弱虫のくせに俺をつかまえやがった。この辺りじゃ食うものがなくなってきたからな。あいつは俺を食うつもりだったんだ」

「ひどいわ」

「小人つてのは昔からずる賢い奴らだったんだ。女王の世界での

うのうと暮らしながら、女王の知らないところで好き勝手に振る舞いやがる。木だつて平気で切つちまうし、鉄も宝石も好き勝手に取りやがる。俺たちの住処を荒らすのもあいつらさ」

「人間みたいね」

「にんげん？ 何だそれ。小人の新しい仲間かい？」

この世界に人間という名前の生き物はいないのか。エタは思った。しかし、ムーに説明しようとしたところで、どう説明すればいいのか分からなかった。苦し紛れに、そうよ、とだけ言っておいた。ムーは無言で進んでいく。風がまた吹き寄せた。エタの赤毛がゆらゆら揺れた。

第9話

東へ続く道は、ますます険しくなってきた。もはや、道ではなかった。動物でさえ、こんな道は通らないだろうと思われた。しかし、ムーはひるまず進んでいく。エタは、その強さに感心しながらついていった。

いきなり、ムーは立ち止まった。

「どうしたの？」

エタはムーの顔をのぞき込んだ。ムーは、急に咳き込んだかと思うと、ぶどう酒のような真っ赤なものを吐き出した。ごぼごぼと音をたて、ムーは真っ赤に鈍く光る液体を何度も吐いた。エタは、驚愕の目でそれを見た。その液体は、自分がいつも作る傷口からあふれるものと、瓜二つだった。

「ムー？」

エタが次に名前を呼んだときには、ムーはすでに倒れていた。息がなかった。身体中の毛が、かちこちに固まっていた。爪も牙も、はがれて地面に情けなく落ちていた。いやな臭いが立ち込めた。生き物が死ぬ臭いだった。エタは鼻を押さえた。急に、自分が生きているのか、不安になった。ポケットにしのばせていたナイフを取り出した。尖った刃を突きつけた。手首を、ムーが吐き出したのと同じ色をした液体が滴り落ちた。

「生きているのね」

エタはうなずいた。少しだけ安心した。けれど、もう東へ連れて行ってくれる案内役はいなくなった。ムーは、すでに半分以上の毛が抜け落ち、肉が乾いて剥がれ落ち、真っ白な粉になりつつあった。エタは、目の前にある事実が理解できなかった。どうしてムーは粉々になっていくのだろう。そのとき、ティナが言った言葉が頭をかすめた。

エタ

急がないと、この世界は崩れ落ちてしまうの。 女王様だけじ

やない。私も、さっきのライオンも。あの草原も、山も海も空も。すべて消えてしまおうの

エタは、少しばかり息が苦しくなるのを感じた。もう一度、ナイフを腕に突きつけた。また、赤いものがあふれ出す。身体中に熱い痛みが走る。

「まだ生きているわ」

ムーが向かおうとしたのは、ここを真っ直ぐのはずだった。エタは、唇をかみ締めると、その道を進んだ。弱音を吐いてはいられなかった。息がまた苦しくなった。そのたびに、エタはナイフで切りつけた。そうでなければ、自分が自分でいられなかった。自分が命を守れているのかも、この心臓が動いているのかも、何一つわからなかったのだ。

第10話

エタが何とか道をかき分けて進んでいくと、目の前に小川があった。小川の水は、濁っていた。エタはおかまいなしに、その水を飲んだ。喉が渴いていた。

しばらくその小川のほとりで座り込んでいると、隣に子連れ鹿が来た。鹿の親子は、濁った水を、少しずつ飲んでいった。

「こんにちは」

鹿の母親は言った。エタは小さな声でこんにちは、と言う。鹿の母親は、長いまつ毛の瞳をまばたきさせると、優しい声で尋ねた。

「どこへ行くの？ お嬢さん」

「東の果てへ、女王様の薬を探しに」

隣で水を飲んでいた鹿の子どもが急におかしな声をあげた。母親の鹿が、驚いてその子どもに声をかけた。何かが落ちる音がした。見ると、子鹿の足が地面に1本転がっている。エタは、また自分が生きているか不安になった。ナイフを取り出し、腕を切った。

「私は生きているわ」

エタが自分の腕に傷を作るその光景を、母親の鹿は眺めていた。そして、3本足になった子鹿のほつたを、ぺろぺろと舐めながら言った。

「あなたは、平気で自分を傷つけるのね」

子鹿は、3本になった足で、落ちたもう1本の足に近寄り、必死にくつつけようとした。しかし、落ちた足は次第に腐り、異様な臭いを放った。子鹿は恐がって母鹿に擦り寄った。母鹿は、哀れみの瞳を子鹿に向けた。そしてまたほつたを舐めだした。

「この森の生き物は、もうすぐみんないなくなるわ」

母鹿はぼつりと言った。

エタ

「ごらんなさい。鳥たちは言葉も忘れてどこかへ飛ぼうとしている。じきに命をなくすことを知っているから、焦っているのかし

ら。…それなのに、あなたは平気で自分を傷つけるのね」

「傷つける？」

エタは怒りを込めて言った。

「これは私の命の証だわ」

その声を聞くと、母鹿はふっと笑った。そして、子鹿を眺めたのと同じような哀れみの瞳でエタを見た。

「あなたは笑顔を失ったのね。そして、自分を平気で傷つけることを知り得たのね」

「笑顔？」

お母さんがいなくなってから、エタは笑うことができなくなった。ふと、お母さんを思い出した。毎朝、髪の毛を結ってくれた、あのお母さんを。

「東に行くのよ」

すべてを忘れるように、エタはつぶやいた。お母さんの顔を、必死に忘れようとして。母鹿は、長いまつ毛の瞳を、またぱちぱちさせた。

「女王様の薬を手に入れるの。そして、もとの世界へ帰るの」

エタは、さよならも言わずに小川をびよりと飛び越えた。鹿の親子は、おかしなものでも見るような目つきでエタを見ていた。エタは、その視線を感じていたが、振り返ろうとはしなかった。すると、後ろで、また何かが落ちる音がした。確かに二つ、音が響いた。エタは、決して振り返らなかつた。何が後ろで起こっているか、察しがついたからだつた。

また、ナイフを取り出し、自分の肌突きつけようとしてから、母鹿の言った言葉を思い出した。

あなたは平気で自分を傷つけるのね

「関係ないわ」

エタ

エタは自分に言い聞かせ、また真っ赤な液体をあふれさせた。なぜだか、痛みを感じなかつた。

「生きていないの？」

もう一度、突きつけた。しかし、やはり痛みは身体を走らない。エタは不安になった。テイナの声が、また脳裏に蘇る。

「私もなの？」

あごがかちかちと音をたてた。エタは、ナイフをポケットにしまい、ただ東へ向かった。もう余計なことを考える暇はなかった。途中何度、転んだか知れなかった。それでもやはり痛みはなく、転んだ、という感覚すらなかった。エタはだんだん恐くなってきた。自分にも、ムーや鹿の親子に訪れた何かがやって来るのだと思った。

第11話

「どうしたのかね」

辺りがすっかり暗くなり、エタが東へ向かう途中で、しゃがれた声が出た。エタは立ち止まり、辺り一面をぐるりと見回した。木のうろの中に、一匹の鳥がいた。真っ白な色をしたふくろうだった。

「女王の命が尽きようとしている。そっちには何もありませんよ」

「いいえ、きっと何かあるわ。女王様の薬を探すの」

ふくろうは、大声で笑った。森じゅうにその声が響いた。木々の枝も、エタの長い赤毛も揺れた。

「あの魔女に頼むというのかい？」

「魔女？」

「あんな意地悪な女、ただで薬を渡すとは思えんが」

ふくろうはそう言って、エタの目の前に舞い降りた。エタの胸まである、大きなふくろうだった。目はぎよるぎよるして、何度も瞳が目の中を回った。

「その魔女が、薬を持っているの？」

「あの女に不可能はないからのう。わしの右目を治したのもあの女じゃ」

ふくろうは右目をぐるぐる回した。左目と色が違っていた。左目は茶色の瞳。右目は青い瞳だった。エタはその瞳の色を見比べながら尋ねた。

「どこに行けば会えるの？」

「東の果ての海に、小さな小島が浮かんでおる。その小島にある、これまた小さな小屋じゃ」

エタは、その小島まで連れて行ってと頼んだ。ふくろうはつなずいてくれなかった。

「わしの命はもう短い。せめて、この森で死なせておくれ」

エタ

ふくろつがそう言ったとき、目の前に小さな男の子が現れた。ふくろつは、その男の子を見て、呆れたように言った。

「また来おったか。おまえにやるものなど、もうないよ」

男の子は、頭がつるりと禿げていた。ところどころに、青白い線が浮き出ている。エタは身震いした。

「髪をおくれよ！」

「小僧、その手にあるのは何じゃ？」

「これだけじゃ足りないんだ」

男の子は、長い髪の毛の束を持っていた。馬の尻尾のようだった。かすかに、付け根の部分に赤いどろどろした液体が染み付いていた。

「あの馬の尾をちぎったか。何とむごいことをする奴じゃ」

「女王がこの世界を捨てたんだ。だから、僕も、パパもママも、みんな髪の毛が抜け落ちちゃったんだ」

エタは、女王様の存在が、いかに重要なのかを感じた。女王様の命が尽きようとしている。ただそれだけで、生き物の命はなくなり、この男の子も、その家族も、髪の毛を失った。きつと、死ぬのも時間の問題なのだろう。

「女王はもうだめじゃ。じきにこの世界も消える」

ふくろつは皮肉を込めて言った。男の子は、勢いよくふくろつの尻尾にしがみついた。

「おまえの毛を抜いてやる。そして、僕の頭に入れるんだ」

男の子はぐいぐいとふくろつの尻尾を引っ張った。ふくろつは痛みをあげた。森に、ふくろつの悲痛な鳴き声がこだました。エタはたまらず叫んだ。

「やめなさい！」

ふくろつも男の子も、エタの方を見た。エタは、自分の赤毛をゆらゆらさせて言った。

「私のをあげる。だから、ふくろつさんに手を出さないで」

そう言って、ポケットからナイフを取り出し、赤毛の束を切った。ざくつと音をたて、地面に赤い長い毛がはらはら落ちた。男の子は

嬉しそうに駆け寄り、その赤毛の束を受け取った。つやつやと光り、それは柔らかく波打った。

「もう行くのよ」

エタはかすれた声で男の子に言い聞かせた。男の子はうなずき、近くの茂みにもぐりこみ、姿を消した。ふくろろは、無残に髪の毛を切り落としたエタを見た。エタは、今にも泣き出しそうだった。

「どうして泣くのか」

「この赤毛、私のたった一つの自慢だったのよ」

ぼろぼろ涙を落とした。ふくろろは、目を地面にやった。真っ赤な毛が、ばらばらになつて地面を覆っている。

「魔女の島へ連れて行ってやるわ」

ふくろろは意を決したように言った。エタは目を見開いてふくろろを見た。

「本当に？」

「乗りなさい」

そう言つて、ふくろろはエタに背を向けた。エタは、そつとその背中にしがみついた。ふわふわの羽根が、エタの身体に触れた。考える間もなく、エタは宙に舞い上がっていた。

ふくろろは、羽音を立てて、森から遠ざかった。下を見ると、森はすっかり枯れはてていた。木々の腐る音がした。ぱきぱきと、枝が落ちる音がした。エタは、短くなつた赤毛を触った。そうしてまた泣いた。ふくろろは、エタが泣いているのに気付いていたが、何も言わなかった。

第12話

夜の中を、森を通り越し、岩山の上を飛んだ。灰色だった空にも、小さな星屑が散りばめられた。その淡い光の中で目を凝らすと、ごつごつの岩肌に、やぎの姿があった。生きているものもあつたし、死んで腐り行くものもあつた。それを見るたび、エタの鼻をいやな臭いが突き抜けた。ふくろうは、つぶやいた。

「もう終わりじゃ」

エタは、そんなことないわと言いたかった。しかし、そんな保証はどこにもない。そのまま、エタは何も言わずに、ふくろうの背中にしがみついていた。

風がざあつと吹き寄せた。ふくろうの身体も揺れた。そのとき、遠くに白く光る海が見えた。

「あの海の真ん中に、小さな島がある」

エタは水平線に目をこらした。ふくろうの息が荒くなっている。

エタは不安になった。このまま、この海へ落ちたらどうしよう。そうしたら、ふくろうも、自分も、死んでしまうと思った。

海の中から真っ白な潮があがった。くじらのような生き物がいた。頭に大きな角が三本もあつた。ふくろうはそのくじらのような生き物の噴き上げた潮を見つめてささやいた。

「あいつももう死んでしまう。最後の潮噴きじゃな」

エタは、ぎゅつとふくろうの背中を握った。ふくろうのあきらめの言葉が、いやだった。自分にも、もう希望はないのだと言われている気がしてならなかった。

また、ざあつと強い風が吹き寄せた。エタは目をつむって背中にしがみついた。すると、前の方から、ごぼごぼと音がする。エタは前を見た。ふくろうが、あのムーが吐いたのと同じ液体を吐き出している。エタは叫んだ。

「だめ！ 死んだらだめよ！」

エタ

ふくろうは、身体をがくと傾け、海へ落ちていった。エタは、叫びながらふくろうの身体にしがみついた。

「お願い！ 死なないで！」

もう一度そう叫んだとき、2人の身体は何か引き付けられたかのように、ふわっと浮かび上がり、どこかへ流され始めた。ふくろうは、吐くのをやめた。エタは、ふくろうの背中の羽根が硬くなるのを感じた。それでも2人は、ふわふわとどこかへ吸い寄せられている。エタはその先を見つめた。小さな島が見えた。

第13話

エタとふくろうが、ふわふわと海の上空を浮かんでいる一方で、水平線の奥では、夜が明けつつあった。

「魔女」

エタがそうつぶやくと、吸い寄せはますます強くなり、あっという間に島にたどりついてしまった。島は、木々の緑も花の色もなかった。モノクロの世界だった。

2人は乱暴に地面に叩きつけられた。エタは一瞬息が止まった。ふくろうは動かない。エタはその身体に手を伸ばした。冷たい。

「いやよ」

エタは首を振った。信じたくなかった。今まで空と一緒に来たのに。

「よく来たね」

後ろから声がした。エタはゆっくり振り返った。

「魔女」

「薬を取りにきたんだろう」

エタはうなずいた。魔女は、おとぎばなしに出てくるような魔女ではなかった。真っ黒な服ではなく、真っ白な服を着ていた。ちょうど、ティナと同じような、真っ白な服だった。

「あんたにややれないよ」

「魔女は冷たく言い放った。」

「どうして?」

「生きることを捨てたあんたにや、生きるための薬は渡せない」
「生きること?」

魔女は、横たわるふくろうの身体に触れた。ふくろうは、みるみるうちに羽根の柔らかさを取り戻し、その目をぱちりと開いた。そして、一声鳴くと、飛び上がって海の向こうへ消えていった。エタは、夢見心地でその一部始終を見ていた。

エタ

「あいつにや生きる意志がある。でもあんたにやそれが無い」

魔女はエタの腕の傷に触れた。傷から、みるみるうちに真っ赤なものがあふれてくる。エタは、身体中の痛みを感じた。

「生きているわ」

エタがつぶやいたとき、魔女は大笑いした。

「生きているって？ バカはおやめ。そんな大量の体液を流して、よく能天気なことが言えるよ。やはりあんたにや薬は渡せないね」
波が島に打ち寄せた。しづきがエタにも魔女にも振りかかった。

「自分を傷つけて、笑顔すら失って、何が『生きている』だい。生きる意志がないから、あたしの力でもあんたの傷を治せなかつた。ふくろつのおヤジは、生きる意志があつたから、死んでもまた生き返ってふくろつに戻ったんだ」

魔女は、とても高い鼻をしていた。目はひどくくぼんでいた。真っ黒な爪で、エタの赤毛をくるくるといじった。

「自分で髪を切り落としたかい。それであたしの気が済むと思つたら大間違いだよ」

「どうということ？」

エタは尋ねた。魔女はまた大笑いをした。びりびりと、その声の振動がエタにも伝わった。

「相手をいたわる気持ちはあるみたいだね。でもそれじゃダメだ」

魔女は、懐から小さな瓶を取り出した。

「これが女王の病気の薬だよ。…欲しいかい？」

エタは勢いよくうなずいてみせた。しかし、魔女はまたにやりと笑った。とても冷たい笑みだった。エタは寒気を覚えた。

「自分をいたわる気持ちはないのなら、やれないね」

「自分を？」

魔女は薬の瓶を、また懐にしまった。真っ黒な爪で、自分の鼻先をいじりながら言った。

「この薬に、あと一つ加えなけりゃならんものがある」

「何？」

「人間の血さ」

エタは息を呑んだ。人間の血？

「それも、生きる希望に満ちた人間の、ね。 あんたは自分をいた
われないから、生きていく気持ちもない。 きつとこの場で死んで
も、あんたにや後悔はないだろうねえ」

「自分をいたわるって？」

魔女は眉間にしわを寄せた。

「そんなこともわからないのかい。 この小娘が」

エタは小さくうなずいた。魔女は、エタの腕を無理やり引つ張る
と、着いてくるようにあごで促した。エタは黙って、引つ張られる
がままに歩いていった。

第14話

数分ほど歩くと、ぼろぼろの小屋があった。ふくろうが言っていた、あの小屋だろうか。

「入りな」

魔女は扉を押して、エタを中に招き入れた。扉は小さく、エタも魔女も、頭を下げなければ入れないくらいだった。小屋の中は、すっぱいような、甘いようなおかしな香りがしていた。部屋の片隅で、ぼこぼこ何かが煮えている。背比べをするように並んでいるいくつものガラス瓶は、紫や桃色の液体で満たされている。床は地面そのまま、壁も天井も、今にも崩れ落ちそうな状態だった。エタは、魔女に言われて、部屋の真ん中に並んでいる小さなイスに座った。

「母親が憎らしいかい？」

いやみったらしく、魔女が尋ねた。エタは、お母さんの顔を思い浮かべた。

「お父さんは、お母さんがいなくなってから、私にかまってくれなくなりましたわ。お母さんは、髪飾りを買う約束を忘れていなくなりましたわ。私の髪を編んでくれる人はいないの。私は一人よ。たまに生きているかどうかもわからなくなるの。だから腕を切るの。そうすると、やっとわかるの。私は確かに生きていますって」

魔女は、大きな目をぎよろりとさせてエタを見た。エタはびくつきとして、動けなくなった。

「子どもの考えることさ。バカらしい」

吐き捨てるように、魔女は言った。

「そうして自分を殺していくのさ。もう誰にも救いの手はのべられないねえ」

「生きているわ。ほら」

エタは、ナイフを取り出して手を切った。しかし、もう赤いもの

はあふれてこなかった。エタは、息苦しさを感じた。目眩がした。
「ほら、もう死にかけている」

魔女は笑って言った。エタは、身体が震えだして止まらなくな
た。

「生きたいかい？」

エタは震えるばかりで、返事ができなかった。

「生きたいのなら、自分の意思で何か言ってごらん」

魔女はエタの周りをぐるぐる回りだした。

「母親が好きであんたを一人にするわけがなかるう。父親がどうして死に物狂いで働くか、考えたことがあるかい、小娘？ 髪飾りが何だい。あんたは母親に何を求めたんだい？ 毎朝髪を結ってもらうことかい？ その赤毛を褒めてもらうことかい？」

エタの目の前で立ち止まると、魔女は大きな目をいっそう大きくして言った。

「生きたいのか、死にたいのか。自分で決めな」

エタは、何か喉の奥から搾り出そうとした。しかし、うまく声にならない。魔女はますます目を大きくした。その瞳に吸い込まれそうなきがした。

第15話

エタの頭の中に、お母さんの顔と、その顔の下で赤毛を編んでもらう自分の姿が浮かんだ。お母さんは言う。

「あなたの赤毛、誰に似たのかしらね」

エタは、くるくると編まれていく髪の毛の感触に夢中になっていた。

「うちには赤毛の人はあなた以外に一人もないのにね」

お母さんは一通り編み終わると、立ち上がって何かを探し始めた。エタは、編まれた三つ編みをいじりながら、お母さんの動きを観察していた。お母さんは、にこにこしながら、黄色いリボンを持ってきた。

「あなたの髪の色によく似合うわ、この黄色」

エタは、その黄色を眺めた。ちょうど、その日のお母さんのワンピースも、淡い黄色をしていた。お母さんは、リボンをお母さんの三つ編みの先に縛った。黄色と、夕焼けのような赤毛がゆらゆら揺れた。お母さんはそれを眺めて言った。

「エタはもう10歳ね。あなたの10歳の誕生日には、可愛らしい髪飾りを買ってあげるわ」

エタは、お母さんが好きだった。何が、どうして好きなのかなんて、わからなかった。理屈は何もなかった。ただ、好きだった。

「生きたいの」

エタは、かすれる声でようやく言った。魔女は、それを聞くと、また大声で笑い出した。その振動で、部屋の片隅の瓶は片っ端から床に落ち、パリンと音をたてていっせいに弾けた。

「生きたいかい！ そうかい！」

魔女は嬉しそうに叫んだ。すると、さっきエタが切りつけた傷か

ら、真つ赤なものがあふれ出した。魔女は、それをすばやくスプーンにすくうと、懐からさっきの小瓶を取り出し、その中に垂れさせた。小瓶の中の液体が、みるみるうちに真つ赤に染まる。「持ってお行き」

エタは、目の前に差し出された小瓶を手にした。自分の血の温かみが残っている気がした。「どうしたい？」

固まるエタをのぞき込み、魔女がささやいた。エタは、泣いた。大声で泣いた。魔女は、優しくエタを撫でた。エタは、少し、魔女がお母さんの匂いと似ていると思った。

「恐かったろう。もう大丈夫。早く、女王にそれを持って行ってあげ」

エタは何とかうなずくと、少しだけ笑った。お母さんがいなくなつてから、初めて笑った。

第15話（後書き）

遅くなって申し訳ないんですが、この小説、短編にのせるつもりで書いたものでした。

ところが思いのほか長くなってしまい、連載にすることにしました。話の切れ方が雑なのはそのせいかも…

「え？こんなところで切るの?!」ってとここで切ってます。おそろしく。

ガーツと連続で読んだ方が、読みやすいのかもしれない。

第16話

魔女の小屋を出て、浜辺に行くと、そこにさっきの潮を吹いていたくじらのような生き物がいた。魔女が言った。

「アラン、この娘を乗せていっておあげ」

アランと呼ばれた生き物は、返事をするかのように潮を噴き上げた。

「岩山のふもとの浜辺につくまで、死んだら承知しないよ」

アランはまた潮を吹いた。エタは、魔女の顔を見た。魔女はにやりと笑って言った。

「お聞き。岩山のふもとに着いたら、今度は青いやぎがいるはずさ。名前をユーラという。あんたを乗せて、枯れた森の入り口まで運んでくれるはずさ」

エタは、小さな声でありがとうと言った。魔女は、また頭を撫でてくれた。そして、すぐにアランに乗るように言った。エタはうなずき、潮を吹くアランのもとへ向かった。

「アラン、よろしくね」

「早く乗りなさいな」

アランは地響きのような声をたてて、エタに三本の角を向けた。エタはそのうちの一本の角につかまり、何とかアランの背中に座った。魔女が浜辺でこちらを見ていた。エタはその姿に向かって手を振った。

アランが浜辺から遠ざかり始めた。エタは、魔女が見えなくなるまで、ずっと手を振り続けた。

エタ

波が荒かった。エタは何度も水しぶきが顔に振りかかり、その度に息を止めなくてはならなかった。水は塩辛かった。水を飲み込みそうになっては、ぺっぺっと吐き出した。

「アラン、岩山まではどのくらいなの」

「そうさねえ、まだ半分くらいかねえ」

「急がないと女王様が死んでしまうの」

「それは私にもどうにもできないねえ。何せこの世界は広いから娘さん、あんたが魔女の小島まで無事にやって来られただけでもありがたいのさ」

エタはうん、とうなずいた。自分は何と無力だろうと思った。腕の傷はまったく痛まなかった。手足の感覚がないように思われた。アランは潮を嘔き嘔き、岩山へ泳いだ。エタは、水平線の向こうに岩山が現れるのをじっと待った。

何時間泳いだらうか。夕焼けが迫っていた。アランは声をあげた。

「もうすぐだよ。娘さん」

エタは、顔をぐっと上げた。水平線の向こうに、ごつごつした岩山が現れた。夕日のせいで、かすかに赤く染まっていた。ふと、角を握っていた自分の手を見ると、夕焼けの色とは対照的に、ひどく青ざめていた。ちょうど、ティナの手のように。

「さあ、お行きなさいな。あそこで青いやぎが待っているよ」

アランは崖の下まで来ると、エタに降りるように言った。崖のところに、青いやぎが待ち構えていた。空色のくれよんで塗りたくったように青いやぎだった。エタが降りようとして、角から手を離したとき、アランの角の表面がはぎ取れてしまった。はぎ取られた角の表面は、かりかりに干からびて、海の中へ落ちた。アランの残った角から、真っ赤な色が透けて見えた。アランは声色も何一つ変えずに言った。

「お気をつけて」

アランはエタが降りたのを確認すると、潮を嘔き上げて、沖の方へ行ってしまった。そのとき、エタは、アランの頭から、角がぼろりと落ちる瞬間を目にした。

「死んでしまうのかしら」

エタはつぶやいた。すると、青いやぎがエタのそばに寄って来た。

エタ

「乗って」

やぎはエタを無理やり背中に乗せると、一気に断崖の絶壁を駆け上った。エタは目をつむった。あまりに速すぎて、目を開けていられなかった。

第17話

ようやく速さに慣れたころ、エタは尋ねた。

「あなたが、ユーラ？」

「そうだよ」

ユーラという青いやぎは、息一つ切らさずに岩山を駆けて行った。どんなに強い脚をしているのかしらと、エタは不思議に思った。

「私は、森からはどうやってお城まで行けばいいの？」

「僕が魔女に言われているのは、枯れた森の入り口まで、あなたを送るように。ただそれだけだよ」

エタは途方に暮れた。森からどうやって城まで行けばいいのか、まったくわからなかった。森までは、ティナがエタを運んでくれたわけだから、エタに道などわかるはずがなかった。

「女王様のご無事を祈ろう」

ユーラがそう行ったとき、目の前に大きな月が現れた。いつの間にか、岩山の頂上に来ていたのだ。月は、エタの世界のような淡いレモン色をしてはいなかった。紫色の、鮮やかな月だった。真ん丸の月は、枯れた森も、ごつごつの岩山も、すべてを明るく照らしていた。

「さあ、あなたも祈って。この月を見るのが、最後になってしまわないように」

エタは、女王が死んでしまえば、この世界も、自分の世界も消えてしまうのだということ思い出した。ユーラに言われるがまま、手を合わせて必死に祈った。

ユーラは、やぎの声をあげた。そして、一気に岩山を駆け下りだした。エタは、必死にユーラの首にしがみついた。ユーラの息が上がつてきているのを感じた。

「大丈夫？」

「魔女から、あなたを送り届けるまでは死ぬなど言われているんだ。

だからまだ僕は死ねない」

ユーラはそれだけ言うと、半分ほど駆け下りた岩山の残りを、一層勢いよく駆け下り始めた。エタは、もう声が出せなくなった。あまりのスピードと振動で、しがみついているだけでやっとだったのだ。

枯れた森の入り口についた。月は青白く色を変え、あたりはうっすら明るくなり始めていた。エタは、ユーラの背中から滑り降りた一瞬、目眩を感じた。ユーラにお礼を言おうと振り向くと、ユーラはそこに横たわっていた。

「ユーラ？」

エタは、触れるまでもなく、ユーラが眠っているのではないことに気付いた。月にしたのと同じように、エタはユーラに向かって手を合わせて祈った。

ユーラは、青い光になって溶けていった。エタは、これ以上美しいものを見たことがないと思った。エタは、ポケットに入っている小瓶を出した。真っ赤な液体は、瓶の中で波打っている。

「女王様のところに行かなければならないわ」

エタは自分に言い聞かせた。森は深く、城がどこにあるかもわからなかった。ただ、とにかく前へ進まなくてはならないと思った。

獣道へ足を踏み入れると、近くの茂みが音をたてた。エタは、足を止めた。何かがいるのだ。

「誰？」

茂みから、男の子が出てきた。禿げ頭の男の子だ。エタが、髪の毛をあげた子だった。

「あ、髪の毛のお姉ちゃん」

男の子は、未だに禿げ頭だった。あの赤毛を使わなかったのだからか。

「おいら、あの髪の毛、妹と弟にあげちゃったんだ。だから、まだ禿げ頭なんだ」

男の子はそう言うてにこにこした。家族思いの、やさしい男の子だと、エタは思った。しかし、ほったはすっかり痩せこけていたし、ぼろぼろの服からのぞく脚は、すっかり骨と皮だけになっていた。食べ物も十分に食べていないのだろう。ムーが言った言葉が頭をよぎった。

エタは、短くなった赤毛に触れた。そのとき、指の間に、赤い毛が束になって絡まった。抜けたのだ。エタは泣き出しそうになった。お母さんに、きれいな寝巻と褒められていた赤毛が、短くなり、今度は抜け落ちようとしているのだ。

「お姉ちゃん、どこへ行くの？」

「女王様のお城よ」

「女王様？」

「君、行き方はわかる？」

男の子は、自分の禿げ頭を撫でながら言った。

「ユニコーンのおじさんを連れてくるよ。あのおじさんは物知りだから、きつとお城まで案内してくれる」

エタが言葉を発する前に、男の子はまた茂みに隠れてどこかへ行ってしまった。エタは、じっと男の子の帰りを待った。

第18話

ところが、小一時間たっても、男の子は帰ってこない。エタは不安になった。

「死んでしまったの？」

つぶやいてみた。頭の上で、鳥たちがギャーギャーと騒ぎ始めた。「いや」

エタはたまらず走り出した。どこが東で、どこか西かもわからなかった。ただ、恐怖感を振り払おうと、必死に走った。

「誰か！ 女王様のもとへ連れて行ってちょうだい！」

叫んだ。もちろん、返事などない。途中、何匹かのさるとすれ違ったが、さるは鳴き声をたてて、木の枝を伝ってどこかへ消えてしまった。森の動物が、みんな我を忘れている。エタは、自分も自分がわからなくなった気がした。腕の傷は痛まない。赤い液体も垂れてこない。こんなに傷だらけなのに、なぜなのだろうか。エタはますます不安になった。

「お願いよ」

もう一度叫ぶと、目の前に大きな動物が現れた。馬の頭に、角がついた動物だった。ユニコーンだ。エタは昔、絵本で見たことがあったので、よく知っていた。ユニコーンはエタの前で、一ついなくなくと、真っ黒の瞳をぱちぱちさせた。

「女王様のお城へ、連れて行ってほしいの」

エタが頼むと、ユニコーンは身体をかがめた。エタは、背中にと乗った。ユニコーンは、すっと立ち上がり、ひづめの音をぱちぱちと鳴らし、走り始めた。

「あなたが、男の子の言っていたユニコーンのおじさんなの？」

ユニコーンは何も言わなかった。エタを背に乗せ、一心に城を目指した。

エタ

「ねえ、何とか言って」

エタはしつこく尋ねた。するとユニコーンはようやく口を開いた。
「黙れ」

ユニコーンの声は震えていたし、からからに乾いていた。
「ここで死んだら女王様が危ない。どうか俺の体力をもたせておくれ」

エタはそれから黙り込んでしまった。自分を必死に送り届けてくれるユニコーンの気持ちを、すくい切れなかった。三角のくじらのアランや、青いやぎのユーラが目には浮かんだ。みんな、自分を必死で送り届けてくれた。ユーラは青い光になって消えたとし、今頃はアランもきつと……。そこまで考えて、エタは考えるのをやめた。ポケットの中に、小瓶があるかを確認した。ポケットの布地の上からでも、それは形がはつきりしていた。固いガラスの感触があった。

森はいよいよ枯れてきた。初めに見たときより、ずっとひどく。枝ばかりの木々は、少しずつ腐り始めた。木々の香りもしなくなつた。するのは、死んでいく動物たちのいやな臭いだけだった。エタは、鼻を押さえようとして、やめた。生と死とを素直に受け入れようと思った。自分の命も、このままではいつ尽きるかわからなかった。

「森の先までおまえを連れて行く。ただし、草原からの道は、俺の体力がもたない」

エタは、それでもいい、と答えた。ユニコーンはそれを聞くと、ふんと笑って答えた。

「草原からの道のりは、むしろこの森の中よりもわかりにくい。それをおまえ一人で何とかなるとでもいうのか？」

「じゃあ、どうすればいいの？」
「俺に考えがある。このまま乗っていなさい」

ユニコーンはそういうと、今まで向かっていた方向を少しそれて進んだ。すると、崖があらわれた。ユニコーンは崖を登り始めた。ユーラと違って、登りにくそうだった。しかし、それでも確実に登っていった。

崖の頂上に着くと、枯れた森を一面に見渡すことが出来た。そのとき、頭の上を何かが飛んでいった。大きな鷹だった。

「おい」

ユニコーンは言った。鷹は、ゆっくり旋回しながら下りてきた。あのふくろよりよりも、何倍も大きかった。ユニコーンですら、その背にまたがれそうなくらいだった。

「この娘を城まで連れて行っておくれ」

鷹は、低い声で言った。

「ユニコーンの脚でも、もうもたないのか？」

「俺はもうだめだ。森の先までが限界だ」

ユニコーンの脚は、がくがく震えていた。息も荒くなっている。

エタは、自分も息が苦しくなった。命が削られているのを感じた。時間がないのだ。

「女王の最期が近い。譲ちゃん、この背中に乗りなさい」

鷹は、エタに背を向けた。

「娘、乗りな。俺の脚じゃ、責任を持っておまえを送り届けることは無理だ」

「ありがとう」

エタは、ユニコーンの首に抱きついた。ユニコーンは、目を閉じて言った。

「さあ、行くんのだ。おまえの勇氣はすばらしい。俺にはとてもじゃないができない」

エタは、ユニコーンから離れると、鷹の背中に座った。毛が深くとても柔らかかった。ユニコーンは、大きくいなないた。鷹はそれを合図に、空高く飛び上がった。

「譲ちゃん、しっかりつかまるんだ。風より速く飛ぶから、下手すれば振り落とされる」

鷹はそう叫んで、キーン…と音をたてて風を切った。エタは、ライオンよりも速いかしらと考えながら、その羽根にしがみついていた。

第19話

森の上を一気に飛び越えた。エタは、枯れ木が倒れていく瞬間を何度も目の当たりにした。生き物の朽ち行く臭いも、度々鼻をついた。鷹は翼を鳴らしながら、空気の隙間をぬって飛んでいくようだった。

「見えてきた」

鷹がつぶやいた。エタは、鷹の頭の前方にあるものに目を凝らした。立派な石造りの城が見えた。鷹は、ぐんぐんとその城に近づいていく。

「女王様が危ない」

急に、鷹は飛ぶ角度を変えた。急降下を始めた。エタは、息を吸うのが困難なほどだった。鷹はおかまいなしに城へと降りていく。城が大きくなってくる。

「ぶつかるわ!」

エタが叫んだ。鷹は城の門を目指した。門が迫る。エタは、ぶつかると思っただけ目をぎゅっとつむった。鷹は、ひゅんと音をたて、門をくぐった。

「大丈夫。女王のもとへ連れて行ってやる」

門を通り越すと、大きな扉があった。扉はがっちり閉まっている。鷹はそのままのスピードで突っ込んでいった。扉が、ガタンと音をたてて開いた。鷹のくちばしが折れているのが、エタに見えた。それでも鷹はひるまず進んだ。

「まるで勇者ね」

エタがぼそりと言うと、鷹は高らかに笑って言った。

「勇者? この汚らしい鷹を、勇者と呼んでくれるのか?」

「ええ、そうよ」

「それはありがとうよ、譲ちゃん」

鷹は、ますます勢いをあげた。赤い絨毯の道が広がった。もうす

エタ

ぐだと、エタは思った。確か、この先には、大きな扉があつて、テイナが手を差し込むと開いたはずだった。ところが、その扉は閉まっていた。ばかんと開き、向こう側までを見渡すことが出来た。

「どうして扉が開いているのかしら」

「女王の力が弱まっているから、この城も壊れだしているんだ」

鷹は、絨毯の表面を、這うようにして飛んだ。とうとう、大きな女王のベッドが現れた。カーテンはすっかりしまっている。

エタは、鷹に下ろすように頼み、背中から飛び降りた。急いでベッドに駆け寄ると、ベッドの横に、白い服の少女がうつぶせになっていた。テイナだった。

「テイナ？ 私、薬を持ってきたわ。 ねえ、テイナ」

テイナは返事をしなかった。エタは何度も名前を呼んだ。

「いやよ」

エタは叫ぶように泣き崩れた。ベッドの周りのカーテンに触れてみた。今日は、この前のように黄金のライオンが飛び掛ってこない。

第20話

カーテンをそつと開くと、そこに、女の子が横たわっていた。見覚えのある顔だった。確かに、毎朝鏡越しに眺めている顔に間違いなかった。

「私」

エタはつぶやいた。それは自分自身だった。長い赤毛は、この世界に来るときと同じようだった。そして、腕と脚に、ひどい傷がいくつもあつた。エタが自分で切りつけた跡と同じ傷跡だった。エタは、目の前のものを信じることが出来なかった。

そうして自分を殺していくのさ

魔女の言葉が頭に浮かんだ。

「私は、私を殺していたの？」

問いかけても、誰も答えてくれない。そのとき、後ろの方で、何かが落ちる音がした。振り返るまでもなく、エタは後ろで何が起きているのかわかった。振り返って見ると、鷹が横たわっている。羽根がすべて抜け落ちている。

「どうして？ みんな死んじゃいやよ！ 私も死にたくないの…生きたいのよ」

エタは、ポケットの中の小瓶を取り出した。鮮やかな赤い液体が波打っている。エタは、手が震えて、その小瓶を落としてしまった。小瓶は、パリンと頼りない音をたて、砕け散った。赤い絨毯が、ますます赤く染まる気がした。エタは、そのままうずくまってしまった。息ができなかった。身体中が熱かった。不思議なことに、痛みはなかった。急に眠くなった。このまま目を閉じようかと思った。生きたいのか、死にたいのか。自分で決めな

魔女の声が聞こえた。エタは、顔を無理やりあげて、叫んだ。

「生きるの」

そのとき、絨毯の上に溢れた小瓶の中の薬が、淡い桃色の光を放

ち始めた。エタは、その光を見つめた。光は、桃色から濃いピンクに変わり、キュンキュンと音をたてて、城中を駆け巡った。ベッドの周りにも、ティナの周りにも、エタの周りにも、その光は飛び散った。

するどい閃光が取り巻き、エタは何も見えなくなった。

気付くと、エタは、若草色の草原に立っていた。草原の奥に、深い緑に染まった森と、まぶしいほどに白い雪をかぶった山々が連なっている。そして、その山の向こうに、紺青の空が輝いていた。山と空の向こうに、エメラルドのように輝く海が見えた。確かに、初めにティナに連れてこられた場所だった。

「ティナ？」

エタはつぶやいた。風が、ざあっと吹き寄せた。黄金のライオンはやって来ない。代わりに、草木の甘い香りが鼻をついた。足元に、黄色や白や紫の花が咲いている。

「生きているわ」

エタはまたつぶやいた。そのとき、森の向こうから、大きなふくろうが飛んできた。真っ白なふくろうだった。ふくろうは、エタの頭の上で三回ほど回ると、大きな鳴き声を響かせて、どこかへ飛んでいった。

「生きているのね」

エタは、お腹いっぱい空気を感じ込んだ。

「みんな、生きているのね」

そのとき、確かに、エタの耳には、ティナの声も、ライオンの声も、ムーの声も、男の子の声も、アランの声も、ユーラの声も、ユニコーンの声も、鷹の声も聞こえた。

「生きているわ」

エタは、そのまま若草色の草原に転がり、寝息を立て始めた。お腹はとても空いていたが、どうしてかいやな空腹感ではなかった。気持ち良かった。生きていることを、心から実感できた。

第21話

エタは若草色の原っぱに眠っていた。家を出て、林を抜けたところにある、広い原っぱだ。手には、空っぽの小瓶が入っていた。一滴だけ、赤い液体が入っていた。エタは、それを日の光に透かしてみた。きらきらと輝いて、その液体はとても美しかった。

身体を起こした。腕を見た。切りつけたはずの傷が、一つ残らず消えていた。肩の辺りに手をやった。切り落としたはずの赤毛が、腰のところで波打っているのがわかった。

エタは自分のほっぺたに手をやった。温かった。

「生きているわ」

つぶやいた。確かに、生きている感覚があつた。痛覚はなかったが、生きていることをしつかりと確認した。

エタは原っぱを抜けた。林の匂いが甘かった。

家に戻ると、窓から誰かが見えた。エタは、急いで扉を開けて中を見た。

「おかえり」

懐かしい声が出た。

「ただいま」

エタは小さな声で言った。優しい手が、エタの髪に触れた。

「こんなにだらしなくして。こっちにいらっしやい。お母さんが結ってあげるわ」

確かにお母さんだった。エタは、信じられずに何度もほっぺたをつねった。お母さんは、鏡の前に座ると、エタに手招きをした。エタは、黙ってその前に座った。

「きれいな髪の毛ね。11歳の誕生日には、髪飾りを買ってあげましようね」

エタは、その言葉に敏感に反応した。いきなり振り向いたエタに、

お母さんはとても驚いた顔をした。

「お母さんは、身体が弱いのか？」

「何を言うの？ 私は生まれてから、風邪なんかひいたこともないのよ」

「お父さんは、今日もお仕事ばかりで、帰って来ないの？」

「今日はどうしちゃったのよ？ お父さんは毎日夜の決まった時間に帰ってくるじゃない。家に帰るのを忘れるなんて、ありえないわ」

お母さんはにこにこして、エタの髪の毛を編み始めた。少しきつく引つ張られながら、髪の毛はきれいに三つ編みを作っていた。

エタは、お母さんが急にいなくなるかもしれないと、不安になった。魔女の声が蘇った。

あなたは母親に何を求めたんだい？

エタは、鏡越しにお母さんに言った。

「お母さん、私、お母さんがいてくれるだけでうれしいのよ。髪を結ってくれなくても、髪飾りを買ってくれなくても、私はお母さんが大好き」

お母さんは、照れくさそうに微笑むと、髪の毛の続きを編み始めた。

「私も、エタが大好きよ」

エタは、その言葉を聞いて、思い切り歯を出して笑った。

窓の外で、風がそよそよ吹いていた。

エタは、腕を切らなくても、痛みを感じなくても、自分は今、生きていくのだと感ずることができた。

エタは、長く柔らかい赤毛に触れて、静かに微笑んだ。もう、一人ぼっちだとは思わなかった。

第21話（後書き）

おしまいです。

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました。

何か、自分で書いたものを後で眺めたら、ちょっと『もののけ姫』とかぶってるなあとか思ってしまった…。

そう感じた方も多かったのでは…と思います。

だからこのお話はかなり不完全だと。思っています。

私が書きたかったのは、生きることについて。

生きているうちって、きつとそういう感覚がないんだと思います。死んで初めて、ああ自分生きてたんやなあとか思うのかなって。

実際、私も今、自分がどう生きてるのかなんてサッパリわかりません。

ただ、息をしてて、痛みとか感じる事ができて。

だから一応、まあ生きてるんだろ。みたいなね。

何だか知らだらと書いてすみません。

この辺にしておきます。

では、本当にどうもありがとう。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7439b/>

エタ

2009年7月3日19時01分発行

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。